

共同研究 「ニュータウンの未来像」

中間報告

西川 祐子・三林 真弓

本研究は、前年度の報告に記したように本大学に隣接する榎島グリーンタウン・向島ニュータウンを研究対象と定め、ニュータウンが現在直面する様々な課題を明らかにし、ニュータウンがこれからどこへ向おうとしているのかを探ることを目的として、2003年度より3年計画で発足した。本年度はその第2年目にあたる。第1年目の研究課題は、ニュータウンをどう「ひらく」か、であった。「ひらく」にひきつづき「つなぐ」というキーワードも生まれた。

本年度は後述の通り、計5回の研究会を開催することができた。とくに第4回研究会では、人間学研究所主催の公開講演会として京都市内でおこない、地域交流と学術交流を実現させることができた。

■第1回研究会 2004年4月16日

於 本学F232教室

1. 発表：川畑直人「団地研究の臨床心理学展開の可能性について」
2. 研究会の進め方についての討論

■第2回研究会 2004年5月28日

於 本学F232教室

発表 その1：

竹口等「崇仁地区、密集市街地のまちづくり
—まち、くらし、人のいぶきをつなぐ—」

発表 その2：

小林大祐「ダンボール・レイキモッキわーく
しょっぽ —スローライフな子育て—」

■第3回研究会 2004年6月25日

於 本学F232教室

発表 『ニュータウンの人類学の可能性』

その1：鶴飼正樹「男性にとってのニュータウン暮らし」

その2：西川祐子「住まいの個人史聞き取り調査 —ニュータウン再入居」

■第4回研究会 2004年10月29日

於 京都私学会館2階中会議室

『公開講演会』

講演者 篠原聡子（建築家・空間研究所主宰、日本女子大学家政学部住居学科助教授）

演題 「個をつなぐ住まい —“住む”側の実験と“建てる”側の実験—」（記録を本誌に掲載）

■第5回研究会2005年2月18日

於 本学F232教室

発表：高石浩一「引きこもれる部屋」

今後の展望として、住戸内の各部屋を、街区のなかの各住戸を、ニュータウンのなかの各街区を、そして全体を“ゆるく”「つなぐ」努力をつづけることはできないものか。さらには、世代と世代、現在の住人と先住の人々との経験と記憶をつなぐにはどうすればよいか。これからはじまる最終年次には、「ニュータウンの未来像」の議論を住民と共有できるようなワークショップその他を考えたい。